

富士山の世界遺産登録の意義

ユネスコは昨年六月二十六日、フノンペンで開催された世界遺産委員会で、富士山を世界文化遺産に登録した。世界の人々が富士山を「世界の宝」と認めた瞬間だ。当初、富士山は自然遺産への登録を目指したが、し尿やゴミ投棄などの環境保全に問題があり、登録に至らなかった。今回の文化遺産登録までには二十有余年の歳月がかかった。

それでは、今回どういう理由で「世界の宝」に相応しいと認定されたのだろうか。認定された富士山の正式名称「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」がその理由を語っている。

富士山ほど日本人の美意識に訴え続けてきたものはない。日本の画人で富士山を描かなかった人はいないといっても過言ではない。富士山は日本の美の原点である。それが、今や「世界の美」となったわけだ。富士山が「芸術の源泉」であることに異論を差し挟む方はいないであろう。

それに対して、富士山が「信仰の対象」として評価されたことに、違和感を覚える方もいるかもしれない。しかし、「信仰の対象」としての富士山が評価された意義は大きい。現在では「富士登山」が盛んで、夏ともなれば数珠つなぎで登山する姿はテレビでお馴染みだ。しかし戦前までは「富士登山」ではなく「富士登拝」であった。富士山に登り、霊地に参詣することは「登拝」、遠くから

ら仰ぐことを「遥拝」と呼び、富士山は信仰の対象であったのだ。

富士山信仰はなぜ誕生したか

日本人万人が富士山を好きだ。予想もしないところで、富士を見つけると、何か一日良いことがありそうな、得した気にさせる富士山。思わず、手を合わせたくなる気分すらする。こうした「畏敬」の念を抱かせる富士山の原点をたどると、古代に遡る。

万葉歌人の高橋虫麻呂は富士を「くすしくも います神かも」と詠った。つまり、富士には神が宿っているというわけだ。なぜ富士は神の山となったかは、古代には富士は噴火を続けていたからに他ならない。噴火をする度に、古代人は、そこに荒ぶる神を見たのだ。霊妙な富士のイメージが、永々と詠み継がれ、語り継がれてきた。富士山信仰の原点は、度重なる「噴火」だった。

富士山信仰の原典―「富士山記」

「信仰の対象」としての富士山を最初に取り挙げた書物は、何と言っても平安前期の著名な漢詩人・都良香（八三四～八七九）が最晩年に著した「富士山記」だろう。「富士山記」の本文はたったの三九一文字の漢文である。十一世紀に刊行された『本朝文粹』にその記は登載されているので、今でも精読できる。「富士山

鉄道の未来学

基調報告 40

2013年6月、富士山が世界文化遺産に登録された。日本人にとって「信仰の対象」であり、「芸術の源泉」である富士山。なぜ富士山が日本美の象徴となったのか、なぜ日本人の心の山となったのか。富士山に登って拝みたいという願いは、どうして生まれたのか。日本人にとっての信仰の山、富士山の信仰文化を解説する。

富士山と信仰文化

拓殖大学名誉教授・理学博士
富士山文化研究会会長・富士学会理事

竹谷靱負

Yukie TAKEYA

富士山・吉田口御師の末裔で、靱負（ゆきえ）は、御師の世襲名。本名は竹谷誠。早稲田大学理工学研究科応用物理学専攻・修士課程修了。NEC中央研究所を経て、拓殖大学工学部情報工学科勤務。著書に『日本人は、なぜ富士山が好きか』『富士山文化―その信仰遺跡を歩く』（以上、祥伝社）、『富士山の祭神論』『富士山と女人禁制』『富士塚考』『富士塚考 続』（以上、岩田書院）、『富士山の精神史』（青山社）などがある。

「記」には、九世紀後半の富士山頂の様子が克明に記されている。現在の頂上の様相と異なるのは、当時火口湖があった点だけだ。平安初期に修験者が登拝していた事実は、驚嘆に値する。都良香が修験者からの聞き取りを記録したものであろう。

「富士山記」では、富士山は「神仙の遊幸する所なり」とされ、神仙郷とされた。「神仙」とは神通力を得た仙人のことで、「神仙郷」は仙人が住み、自在に場所を移動し、不老不死薬を調合する場所である。中世には、富士山は神仙郷のひとつ、蓬萊山に見立てられた。

富士登拝の開祖・役行者

「富士山記」によると、富士山を開墾した人物を役行者えんぎょうじやとしている。役行者は、七〜八世紀の人で、大和国葛城山かつらぎの麓に生まれた。葛城山で難行を重ね、空中飛翔の術などの呪術を会得した。讒言ざんげんにより伊豆大島に流されたが、昼間は島にとどまるが、夜には空中飛行し富士山に至り修行した。この伝説に基づき、役行者が富士山に初登拝した行者として伝承されてきた。以来、修験者は役行者を修験道の開祖と崇めた。神が宿る山に同化して山氣を受け、神通力を身に付ける修験の霊場、それが富士山だった。

富士山頂は不動明王の住み処

それでは、なぜ修験者は富士山頂を目

指したのだろうか。修験者は不動明王を自己の守護仏としているが、同時に除災（除病・除障・除魔）の仏としても崇拝している。不動明王は、常に火焰かえんの中に安住し、諸々の障りや穢れけがれを焼き尽くす修験者の本尊というわけだ。不動明王は火焰を背にして右手に剣を取り、左手に絹索けんさくを持って、憤怒の姿であることが多い。不動明王はさまざまな煩惱を焼き払い、悪魔を降伏させ、修験者を擁護し菩提を成就させ長寿を得させるといふ。富士山頂上、特に噴火の火焰が渦巻く剣ヶ峰が不動明王の住む場所とされた。修験者は頂上の火焰の中に現出する不動明王を拝したのだ。

面白いことに、修験者が残した各種の『富士山縁起』では、富士山の祭神は赫夜姫かきよひめとある。「富士山記」と『竹取物語』が習合して成立した説話だ。この説話は、江戸初期に祭神が木花開耶姫命このはなひらくやひめのみことに代わるまで継承された。

浅間大神と浅間神社

「富士山記」に話を戻すと、「古老が言うには、富士山には神が宿り、神の名は浅間大神あさまのおおかみである。貞観十七（八七五）年十一月五日、官民が旧来の方法に則り祭祀をした」と記している。

平安初期の富士山の噴火は、駿河国と甲斐国からの甚大な被害報告を受けて、大和朝廷も無視できなかった。噴火の度に朝廷は奉幣使ほうへいしを派遣し、鎮火祈願を目



北口本宮富士浅間神社。桃山時代に築造された東宮本殿。本殿は三棟あり、いずれも国の重要文化財に指定されている。

的に浅間社を造営し、浅間神を祀った。仁寿三（八五三）年までに、浅間神は浅間大神に昇格して、それと同時に、無位の名神から従三位に叙せられている。その後、浅間大神は正三位、従二位、名神大へと、時代を経るにしたがつて、その神格は進階していく。噴火するたびに、浅間大神に対する畏怖の念が鎮火への祈りの祭祀へと駆りたてたのだ。それに伴い、不動明王に代わって、浅間大神が富士山に影向したことにより、不動明王は地主神と呼ばれるようになった。

『浅間神社の歴史』（名著出版）によると、昭和初期の時点で、全国計一三一七社を数えた。さらに他社に合祀されて社号が変わったものを含めると、実に一九〇〇社に上るといふ。その中心をなす社は、「富士山本宮浅間大社」（静岡県富士宮市）と「北口本宮富士浅間神社」（山梨県富士吉田市）の二社であろう。「世界の宝」の構成要素には、この二社を含め計八社が登録されており、その多くが登拝道の起点にある。

現在、浅間神社の祭神は木花開耶姫命を主神とし、左右に父の大山祇神、夫の天津彦彦火瓊瓊杵尊を伴う三神であることが多い。

大日如来と浅間大菩薩

一方、奈良末期から平安初期にかけて神仏習合が盛んになり、本地垂迹説が登場する。「本地」とは、仏の「本源（本

来の姿）」であり、「垂迹」とは、仏が衆生を救うために「神という仮の姿」でこの世に現われることを意味する。その結果、平安末期から鎌倉期にかけて、それぞれの神に対して本地仏が対応づけられた。富士山でも、浅間大神に代わって大日如来が支配するところとなり、本地仏の大日如来に対応して、浅間大神は浅間大菩薩となった。富士山は、村山（富士宮市村山）を中心に発展する。村山修験が山全体を曼荼羅世界に見立て、数多の神仏が奉納されたり、数多くの神仏名を冠した霊場が設置されたりした。

「畏怖」の山から「庶民」の山へ

中世までは、富士山に登拝するのは、修験者に限られ、富士山は庶民を受け入れない「畏怖」の山だった。江戸時代になると、修験者以外に商人・職人・農民らの庶民も富士登拝する富士講が江戸を中心に栄え、一気に富士山は「庶民」の山となった。その開祖・藤原角行（二五四―一六四六）は元修験者であった。角行によると、富士山は天地開闢の始めにでき、国土の御柱であり、万物の根元であるとする。富士山の山霊・仙元大菩薩（浅間大菩薩）を信仰すれば天下泰平・国家安泰を期すことができるというのが角行の教えだ。役行者の夢告にしたがい富士山西麓の人穴（富士宮市人穴）で修行し、元亀三（一五七二）年、吉田口（富士吉田市上吉田）を起点とする

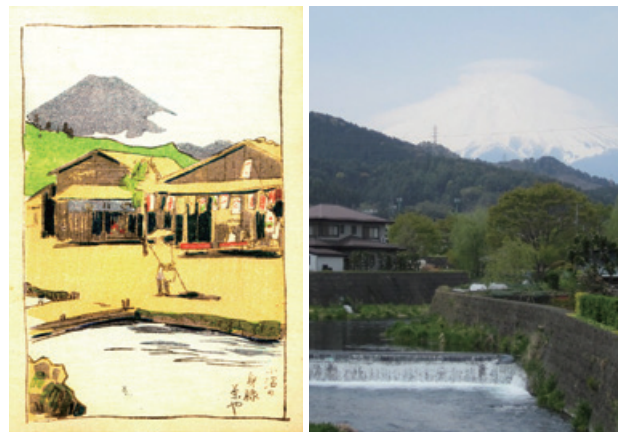
登拝道）より登拝し、その後諸国を遊行し、各地の湖水で水垢離を行った。富士講では、角行が水垢離した内八海（富士五湖・明見湖・四尾礼湖・泉瑞）の聖地巡りが流行した。正保三（一六四六）年、百六歳の折、角行は人穴にて入定したため、人穴は富士講の聖地となり、このたび「世界の宝」の構成要素となった。

身祿入定の烏帽子岩も聖地に

富士講の中興の祖と呼ばれる食行身祿（二六七―一七三三）は、伊勢川上の生まれ。釈迦が「弥勒」となって再現して世直しをするという願いを込めて「身祿」を名乗る。享保十八（一七三三）年、身祿が吉田口より登拝し、理想世界の弥勒の世の到来を願い、七合五勺（現・八合目）の烏帽子岩の傍らで入定し即身仏となった。その後即身仏は烏帽子岩の傍らの石棺の中に納められ、お祀りするためにその上に身祿堂が建てられた。これを契機に、江戸を中心に富士講徒はこぞって身祿所縁の吉田口より登拝し、吉田口は一気に繁盛した。江戸後期には、「江戸八百八町に八百八講あり」と言われるほど富士講は繁栄した。

武蔵野の丸嘉講田無組

筆者が住んでいる東京都武蔵野市では、江戸後期から昭和六十年頃まで、富



左：「小沼の身祿茶や」（杉浦非水画「富士山スケッチ」金尾文淵堂刊・明治41年、山梨県立図書館蔵）右：桂川の「富士見橋」付近から見た富士山

士講の講集団・丸嘉講田無組が活動していた。その組織は、現在の東京都の多摩地区の他に所沢市・新座市などの埼玉県にも及び、広範な地域に勢力を伸ばしていた。それを統括していたのが、関前村（東京都武蔵野市関前）の有名な大先達・初代秋本安五郎（行名・敬行道達）（二七八―一八六五）で、以後四代目まで「安五郎」を襲名し大先達を継いだ。五代目が落語家の故春風亭柳昇師匠で、先達とはならなかったが、昭和五十一年に「太々神楽」を北口本宮富士浅間神社に奉納し、御師・上文司家に太々神楽奉納届額を献呈するなど、熱心な富士講徒であった。

丸嘉講田無組の富士山への行程

現在では、日曜日ともなれば、丸嘉講田無組の中心地のひとつ三鷹駅から中央本線と富士急行線を結ぶ直通の「ホリ

「快速富士山号」に乗れば、御師町の富士山駅まで一時間五〇分弱で着く。

それに対して、富士講が盛んであった江戸時代には、富士登山の道中はどの程度の日数を要したのだろうか。

秋本家の富士講史料は、現在、武蔵野市教育委員会が管理しており、閲覧できる。その中に文化六（一八〇九）年と万延元（一八六〇）年の『登山道中入用帳』がある。両帳面では、休憩場所、宿泊所が同一なのは興味深い。文化六年の道中の構成員や行程を概観してみよう。一行は大先達・安五郎に引率された、三十二カ村から選ばれた九十三名の講員で構成される。十軒の上吉田の御師宅に村単位で分宿するという大集団であった。

行程の初日は関前村を出発し、上石原・府中を経由して日野の玉屋にて宿泊。二日目は八王子・駒木野・小仏峠・小原を経由して上野原の大和泉屋にて宿泊。三日目は野田尻・犬目・鳥沢・猿橋を経由し、大月で甲州道から別れ、富士山を目指して「ふじ道」を上る。谷村を経て「身緑茶屋」で知られる小沼の林屋で宿泊し、四日目は、小沼から上吉田の御師宅まで。都合関前村・上吉田間、三泊四日の行程だった。

小沼の身緑茶屋はどこか

小沼の林屋の茶屋が、身緑茶屋と呼ばれたのは、ここに食行身緑自作とされる身緑像が祀られていたからだ。林屋は、



小沼村林屋発行の食行身緑百五十年遠忌記念の木版画（武蔵野市・秋本家旧蔵、武蔵野市教育委員会保管）

明治十五年の食行身緑百五十年遠忌のとき、木版を発行している。

上部には三峰富士の図と「参明山體」の大文字、その下に、
けさ迄のつみハゆるして
あすよりの 心のか、み
日々ときめけ

この身緑の御詠歌が記されている。下には、盤石上の身緑尊像が描かれ、その右わきには、版元・販売元の「北口小沼村林屋」が記されている。

一体全体、「身緑茶屋」はどこにあったのだろうか。その名に魅かれて、富士急行線に乗り、小沼の地、三つ峠駅で下車して身緑茶屋を探してみた。

地元の『西桂町歴史散歩』によれば、身緑茶屋は不二山一乗寺（山梨県南都留郡西桂町小沼）参道入口付近に、明治末年頃まであったとあるが、場所は特定されていない。幸いなことに、明治四十一年刊の画家・杉浦非水の『富士山スケッチ』（金尾文淵堂）に「小沼の身緑茶や」と題した版画がある。それを頼りに一乗寺付近を歩いてみた。近くの桂川に出てみると、スケッチとそっくりの場所が見つかった。左側の倉見山の山裾といい、富士山の見え方といい全く同じで、多分

この辺りと得心した。

小沼の身緑茶屋の今昔

さらに、その周辺を探索した。茶屋の付近には、明治十五年、身緑百五十年遠忌を記念した、都合三基の石碑が今に残る。ふじ道の分岐点には石柱道標も佇んでいる。身緑の遠忌を大々的に喧伝して、地元が富士講徒の誘致活動が行った証であろう。

明治三十五年、中央線が大月まで開通すると、翌年には富士馬車鉄道が大月・小沼間、都留馬車鉄道が小沼・下吉田間にそれぞれ開通した。小沼駅で軌道の幅の異なる馬車鉄道を乗り換えねばならなかった。小沼駅は中継基地として一定の賑わいを呈していた。

大正十年、大月・上吉田間に馬車に代わって電車の運転が始まり、さらに富士山麓電気鉄道（現・富士急行）が昭和三年に現在使用の路線を敷設し、その結果馬車鉄道は廃線となり、小沼は急激に寂れた街と化した。

小沼に馬車鉄道の駅舎ができた時に、林屋も含め宿屋が駅前に移動したが、いずれの旅館も今は無い。「林屋」の屋号

を持つご子孫をお訪ねしたが、古い話で詳細は不明とのことであった。

小沼浅間神社の水垢離場

往古を偲び、富士山目指してふじ道をしばらく進むと、小沼浅間神社に到る。境内には滾々と湧き出る富士の湧水がある。昔は水垢離を行う富士講徒で賑わった禊所が偲ばれる。我先にと水垢離して涼をとった富士講徒の姿が目につく。

大月から富士山駅までの富士急行線は、ふじ道に沿って右に左に交差しながら進む。ふじ道には富士講遺跡が諸所に点在しているので、富士急行線各駅停車の遺跡巡りもお奨めである。

富士登拝の追体験

そしていよいよ富士登拝だが、まず登拝道・吉田口の起点である北口本宮富士浅間神社に詣でて、富士登拝の無事を祈願したい。その上で、富士講徒が歩んだように、一合目・二合目と歩を進め追体験したい。霊場の旧跡では、往古を偲び参拝したい。富士講徒は登拝道以外には決して立ち入らず、山を汚すことを極力恐れた。山に入る時には、神仏の霊地を汚さないようにと極力配慮したのだ。こうした富士講徒の信仰心にも思いを馳せて、日本人の「心の山」である富士山を登拝したい。